なごや文化情報

2018
11・12
November / December

No.383

NAGOYA
Cultural
Information

随想／濱田樹里（日本画家）
視点／活性化するダンス界のスタジオ公演
この人と／中川幸作（写真家）
いとしのサブカル／菅沼朋香（アーティスト）

公益財団法人 名古屋市文化振興事業団

2018
11·12
November / December

表紙

作品
photon
（2018年／4K映像）

この作品は、水面に反射する太陽の光を撮ったもの。
photon とは、素粒子の「光子」という意味。
光が粒が水面を漂い、溢れ出す。
もしかしたら、光が生まれる瞬間なのかもしれない。

水野 勝規（みずの　かつのり）

1982年　三重県生まれ
2008年　京都市立芸術大学大学院修了
2014年　「カミノ／クマノ」（三重県立美術館）
2018年　「モネ それからの100年」
（名古屋市美術館、横浜美術館）

Contents

名古屋市民文芸祭　小・中学生の部　受賞作品 …… 2
随想　世界の人々が魅了される日本の美
濱田　樹里（日本画家） …… 3
視点
活性化するダンス界のスタジオ公演 …… 4
この人と･･･
中川　幸作（写真家） …… 6
ピックアップ
みなみシニア吹奏楽団･平均年齢60歳超えの熱い吹奏楽 …… 10
いとしのサブカル
菅沼　朋香（アーティスト） …… 11
おしらせ …… 12

「なごや文化情報」編集委員
上野 茂（ナゴヤ劇場ジャーナル編集長）
森本悟郎（表現研究･批評）
山本直子（編集･出版 有限会社ゆいぽおと代表）
吉田明子（人形劇団むすび座制作部長）
米田真理（朝日大学経営学部教授）
渡邉 康（椙山女学園大学教育学部准教授）

「2017年　名古屋市民文芸祭」
（第六八回名古屋短詩型文学祭）小・中学生の部
詩の部　受賞作品より　※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆名古屋市長賞◆

椙山女学園大学附属小学校3年
山田 莉緒

「ねこのもものヒミツ」

おばあちゃんのねこのももは
ひみつのファスナーを持っている
おばあちゃんは
何度も見たことがあると言う

おばあちゃんがももを洗ったら
体のどこからか
金かが出てきたと言う
わたしは本当にその金かを
見せてもらってさわったことがある
これはヒミツ

おばあちゃんがいない時
おばあちゃんのねこのももは
るすばんしている間に
マッサージきにすわって
タバコをすってくつろいでいるらしい
そして
暑い時にはファスナーを開けて
毛皮をぬぐこともあるらしい
これもヒ・ミ・ツ

ももものひみつは
ほかにもたくさぁんあるけれど
やっぱりヒ・ミ・ツ

随想

世界の人々が魅了される日本の美

濱田（はまだ） 樹里（じゅり）（日本画家）

インドネシア生まれ。愛知県立芸術大学大学院修了。
愛知県芸術文化選奨文化新人賞、名古屋市芸術奨励賞、名古屋市文化振興事業団芸術創造賞、東山魁夷記念日経日本画大賞展大賞。
愛知県美術館・一宮市三岸節子記念美術館にて個展開催。
パブリックコレクション：愛知県美術館・平塚市美術館・高橋コレクション・愛知県立芸術大学

常夏の国インドネシアで生を受けその大地で育った私は、小学校を終える頃に日本へ帰国することになりました。初めて感じる日本は、アジアの湿気を持つ風土の中で繊細な色彩を内包し、緻密な仕事を重ねた文化を誇る四季に彩られた国でした。

東洋と西洋が混在したインドネシア文化に触れた私は、その絵画などの美しい美術品の魅力に惹かれ、美術の道へ進み、またそこに自身のルーツを求めるかのように日本画を専攻し多くを学び表現することを覚えました。現在は作家活動を行うとともに、大学でも教鞭をとっています。

私自身が日本の芸術に魅了されたように、多くの留学生もまた同じように日本への、そして日本画への関心をもって私の研究室の扉を叩き熱心に学んでいます。

四季の移ろいから生まれた絵画様式、自然を愛でる心の象徴である花鳥風月、その風土と歴史の中で千年以上も受け継がれてきたのが「日本画」です。日本人の持つ豊かな感性と自然への敬意は日本画の画風を構築しました。水と自然の恩恵である和紙、天然石を砕いた岩絵具を一筆ずつ丁寧に重ねることで得られる豊かな色調、対象と真摯に向き合うことを重んじる写生、それらが織りなす表情を基に様々な制作を行います。そしてそれぞれの工程は画面上で起こる表現のすべてに意味を持たせることになります。様々な技法を学び、和の装飾美について感性を磨き、確かな基礎力をつけることで幅広い表現の可能性を見出すことができる芸術表現です。世界を魅了する日本の芸術表現として日本画を学んだアーティストが、国内だけにとどまらない活躍をしているのも事実です。

常夏の国で鮮やかな色彩と強烈な日差しの中、突如として降り出すスコールを全身で感じ得る環境にいた私が、帰り来た日本で感じたのは「異文化」としての日本でした。異文化をどのように受け止め、受け入れるかといった視点で、日本文化に魅了され、勉強に訪れる留学生に当時の自身を重ねてみることもしばしばです。

今日若者を魅了し続ける漫画やアニメ。感覚や外界をとらえる感性の根底に、それらの現代表現が息づいている若者たちにとっても、ある意味「日本画」も「異文化」として映り、驚きと感動を持って臨むことになるのかもしれません。その人間が持ち得る「感動する力」を手掛かりに、私自身もその魅力を探求し続けていきたいと思います。そして活動を通してより多くの人にそれらを伝えていくことができればと思います。

Report 視点

ダンサーの汗が光る。手を伸ばせば触れることのできる至近距離で、熱気あふれる激しいダンスが繰り広げられる。モダンダンスの倉知可英（※１）が主催する「NAGOYA DANCE SCENE」（以下ＮＤＳ）のワンシーンだ。会場は現代舞踊の草分けで、倉知の大叔母である奥田敏子が遺した瑞穂区のスタジオ（studio K.K. nagoya、キャパシティ50〜60席）。倉知はこのスタジオ公演を2015年にスタートし、年に２〜３回のペースで開催。毎回２〜４ステージを行い、今年８月の第８回公演までに全20ステージを実施。総入場者数1054人を動員している。（まとめ：上野茂）

活性化するダンス界のスタジオ公演

（下）公演後はダンサーと歓談も
（左）瑞穂区にあるスタジオ K.K.

（左）ダンサーと観客が一体化する

先陣を切ったのはモダンダンスの倉知可英

倉知はスタジオ公演を始めた動機を「劇場公演に掛かる多くの経費や観客動員（ノルマ）がストレスになり、作品創作に集中できない。それは主宰者に限ったことではなく、若いダンサーたちも同様。もっと気軽に作品を発表できる場が欲しかったし、後進たちにも負担なくそのような場を提供したかった。ＮＤＳは、基本的にチケットノルマなし、ギャラなし（動員協力にはバックあり）。さらに舞台スタッフとも従来の雇用関係ではなく、主催者の一員として一緒に舞台を作っていく組織“seeds dance company”（seedsとは、種をまく人々）を立ち上げました」と語る。

その結果入場料金も安くでき、チケットは毎回（定員50〜60人）ほぼ完売。「地元のダンサーや振付家がＮＤＳに参加したいと言ってくれるようになりました」と確かな手応えを感じている。

評論家も絶賛したプログラム

とはいえ、スタジオ公演を行うにはそれなりの規模の稽古場が必要だ。有料公演ともなれば、それなりの客席は必要になる。スタジオの約半分が客席になるため、ステージとして使用できるスペースは限定される。作品の性格上、それが可能なのは比較的ムーブメント（運動領域）が小さく、少人数で行われるモダンやコンテンポラリーということになる。

舞台専門紙「ナゴヤ劇場ジャーナル」は17年11月号の「舞台批評」で第６回のＮＤＳ（同年９月）をとり上げ、「斬新で先鋭的、さらに趣向にも富むダンスをパワフルに繰り広げて見せた１時間半に感嘆し、高揚した」と紹介。倉知が構成・振付・出演した舞踊、演劇、音楽のコラボレーション「彼岸花」を「アイデアと実行力次第で舞台芸術は限りなく広がることを証明した」と絶賛した。倉知は「従来から行っている他ジャンルとのコラボレーションをＮＤＳでも継続する。さらに他の集団との共同制作にも着手したい」と構想を膨らませている。

コンテンポラリーの石原弘恵も清須市で

東海地区で自前のスタジオ公演に着手したのは倉知だけではない。ダンサー、コレオグラファーとして全国のコンクールで高い評価を得る清洲モダンダンスアカデミーの石原弘恵（※２）は、新スタジオ Hiroe Ishihara Dance Studio が完成した17年11月に第１回の「ショーケース BOX」（以下ショーケース）を実施。石原のスタジオは広く、昼夜２ステージで349人を動員している。

筆者が清洲城近くの同スタジオを訪れたのは第２回のショーケース（18年４月）。決してアクセスが良いとはいえない場所だが、開場前から続々と人が集まり、この日も２ステージで347人を動員した。

プログラムは20作。切れ目のない、スピーディーな進行である。出ハケするダンサーたち、出番を待つダンサーたちを目の当たりにできるのも、スタジオ公演ならでは。主宰の石原は群舞３作、アンコールにはドラムスの生演奏でポールダンスを披露した。劇場公演では見ることのできないダンサーの一面が見えるのもまた、スタジオ公演ならではだ。

（左）清須市にある石原のスタジオ

（下）肩を寄せ合い、開演を待つ観客

メリット多いがデメリットも…

石原はスタジオ公演のメリットを「ダンサーの息吹と迫力をダイレクトに感じていただけること。多彩な作品の多彩な世界観を感じていただけること。そして清須市に足を運んでいただけること」とし、「今後ショーケースを通して、新たなダンサーや作品を紹介していきたい」と抱負を語った。それが劇場公演やコンクールに反映されれば幸いである。

スタジオ公演にもデメリットはある。当然スタジオには本格的な照明、音響の設備がないが、それは覚悟の上。筆者は「不便」「狭い」「不自由」の３点を挙げる。「不便」は交通アクセス。倉知のスタジオは至近の地下鉄駅から徒歩７～８分。石原のスタジオは新清洲駅から徒歩10分ほどだが、初めて訪れる場合には下調べが必要だ。「狭い」は客席。簡易椅子は窮屈なだけでなく、長時間座っているとお尻や足腰が痛くなる。「不自由」はトイレ。絶対数が足りないし、男女共用にも抵抗がある、上演中には使えないなど不便な点が多い。

今後スタジオ公演はさらに増加するだろう。主催者には、自団の都合だけでなく、来場者の立場に立った会場づくりをしてほしいものである。

（右）白熱の演技が目前で展開される

プロフィール

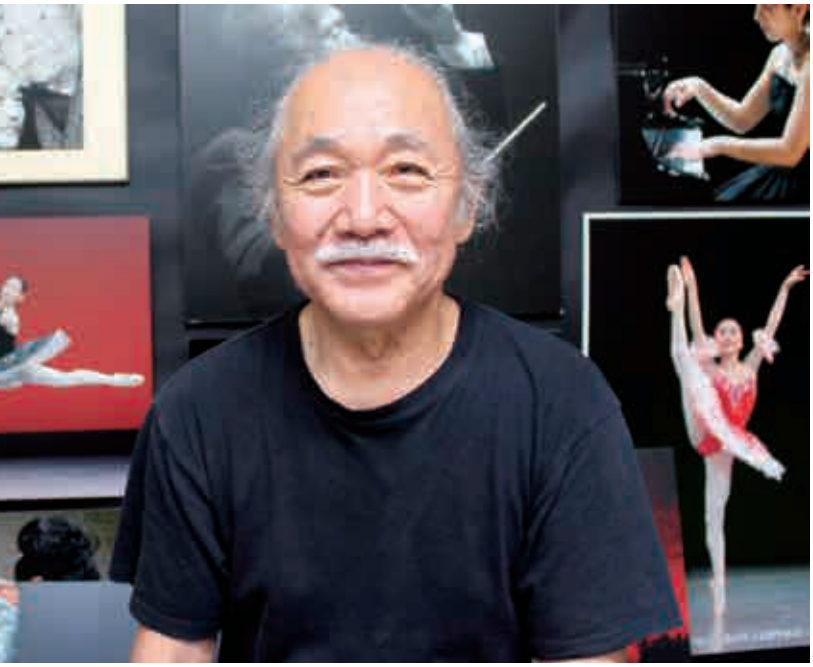
（※１）倉知可英

大叔母で名古屋地区現代舞踊の草分けとして知られる奥田敏子に手ほどきを受け、98年に愛知県の助成を受け渡仏。ジャン・クロード・ガロッタが主宰するカンパニーで研修。修了後、同カンパニー・メンバーとして国内・外のツアーに参加。06年に帰国し、ダンサー、振付家、ジャイロキネシストレーナーとして活躍している。12年度名古屋市芸術奨励賞、14年に名古屋市民芸術祭特別賞を受賞している。

（※２）石原弘恵

中京女子大学卒業後、至学館大学大学院に入学し、健康科学専攻修士を取得。04―08年、ニューヨークでコンテンポラリー、ジャズファンクなどを学ぶ。清洲ＭＤＡ講師、至学館高校ダンス部コーチ、至学館大学非常勤講師、同創作ダンス部外部講師。主演ダンサーとして、振付家として、そして指導者として、全国のダンスコンクールで入賞多数。８月に行われた「東京なかの国際ダンスコンペティション2018」（創作部門）でも第１位に輝いた。

この人と…



写真家

中川（なかがわ） 幸作（こうさく）さん

すべては人のつながりで

手元に『命が煌めく瞬間 中川幸作写真展』という図録がある。清須市はるひ美術館が2016年４月23日から６月14日まで開催した写真展のものだ。ここには画家、陶芸家、指揮者、楽器奏者、声楽家など、さまざまな人の「命が煌めく瞬間」が収められている。「瞬間」が切り取られてはいるが、画家であればその作品が目に浮かぶようであり、指揮者であれば音が聴こえてくるような写真の深みに惹きつけられた。

（聞き手：山本直子）

はじまりは押入れの暗室

中川幸作さんは1946年10月12日、新潟県佐渡島に生まれた。写真に興味をもったのは小学校６年生のとき。まだまだカメラが高級品だった時代に、７歳年上の兄がブローニーの二眼レフのカメラを持っていた。その兄に撮影と現像を教えてもらったのがすべてのはじまり。当時は、押入れや夜の風呂場を暗室にして現像していたが、白い紙を現像液に入れると絵が浮き出てくることに衝撃を受けた。

修学旅行で初めて新潟に行ったときには、兄のカメラを借りて好きな女の子やネオンサインなどを撮影。自分でモノクロプリントもした。酢酸の匂いと黄色い電球の薄暗いなかで浮かび上がる画像に感動したという。

高校生　同級生と佐渡汽船にて

県立新潟工業高校に進学し、大学に行かない代わりにカメラが欲しいと父親に頼んで自分のカメラを手に入れた。２、３人で写真部をつくり暗室を確保。カメラを提げて歩きまわってはいたが、なぜか作品はほとんど残っていない。

1964年６月16日、新潟県を中心に大きな被害をもたらした新潟地震が起きた。マグニチュードは7.5。前年の国体開催にあわせて架け替えられたばかりの昭和大橋が落下し、高層鉄筋建造物が倒壊し、石油タンクが爆発・炎上した。このとき、中川さんは地震発生直後の写真を何枚も撮っている。後日、気象台に勤める親戚の人から展示をするので写真を貸してほしいと言われ、「記録写真」の意味に気づいた。

新潟地震で陥没した線路　燃えているコンビナートの煙も見える

二科展写真部初入選は「太郎と花子」

1965年、高校を卒業し、三菱重工株式会社に就職して名古屋へ。当時は旭丘高校の正門前に寮があり、現在のナゴヤドームのところに工場があった。敗戦後20年経っていたが、まだ壁に弾痕が残っていたりした。一つの部屋にエンジンが6機くらい回っていて、耳栓をして大きな声で話すのが日常だった。最初は漁船のディーゼルエンジンの研究に従事した。その後、写真を撮っているからという理由で新しくできる商品研究課に異動。ここではルームエアコンの研究に励んだ。

もちろん、写真は撮り続けていた。新潟で出入りしていた写真材料商に、当時から全国的に有名だった名古屋の臼井薫氏を教えてもらっていたことが縁で、師事した。「中部二科展」にも毎年出品した。高校時代に手に入れたカメラはアマチュア用で、撮った写真を大きく引き伸ばすと周辺がぼけてしまうので、一眼レフのカメラも購入した。

社会人　新しいカメラを手に

カメラをかついで堀川沿いを日暮れまで下り続けたこともあった。子ども、犬、猫となんでも撮った。お祭りに出ていた露天商を勝手に撮って怒鳴られたこともある。

1967年、「第52回二科展写真部」初入選。朝早くカメラを持って歩いていたときに出会った新聞少年と新聞少女を撮った作品で、師匠が「太郎と花子」と名づけてくれた。家計を助けるために、子どもたちが新聞配達をする時代だった。翌年は「昼下がり」が入選。これは蒸気を出して走る汽車を背景に物干し台にいる犬を撮ったもの。寮の近くで撮影した。

二科展写真部に初入選した「太郎と花子」の前で（1967年）

片手間でなく写真をやりたい

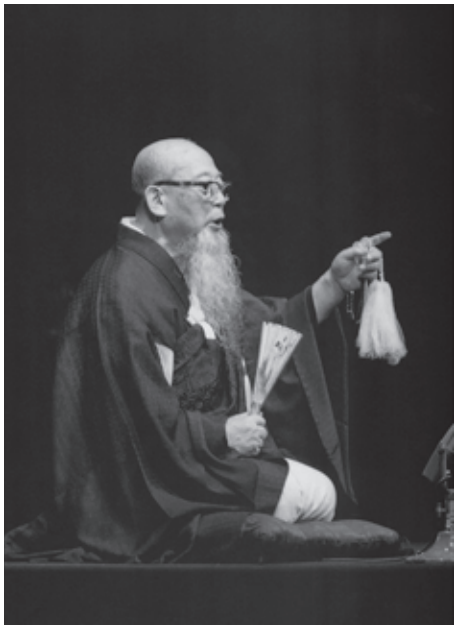
二科展に入選するようになると、デザインをしていたり絵を描いていたりという仲間ができた。芸術家の卵たちだ。友人のアトリエに暗室を作ってもらうと入り浸りになり、そこから職場に通っていた時期もあった。

1970年頃、写真家 高間新治氏に師事。グループ展「水長展」にも出品。大作が流行っていて、90センチ×4.5メートルの作品を出したこともある。大きすぎて壁に掛けられず、床に寝かせて展示された。現代美術の影響を受け、新しいことにどんどん挑戦した時期だった。食べていけるかどうかはわからないが、片手間ではなくて写真でやっていきたいという気持ちが芽生えていた。

ちょうどその頃、製版フィルムの会社を起こす人がいて、一緒にやらないかと声をかけられた。渡りに船と三菱重工を辞め、盛大な送別会を開いてもらった。しかし、事業はうまくいかず、食うや食わずの生活が1年くらい続いた。一生懸命働いても全然食えないということがあるのだと知った。この窮地に助け船を出してくれたのは、師匠の臼井薫氏。コニカ系の現像所を紹介してもらって、そこで4年ほど働いた。

節談説教師・祖父江省念住職を撮る

現像所で働いているときに通っている喫茶店があった。その店の常連に俳優の祖父江文宏氏がいた。文宏氏の父上は節談説教で有名な有隣寺の祖父江省念住職。あるとき、レコードを出すのでジャケットの写真を撮ってもらえないかと頼まれた。これがプロとして初めての仕事となった。なお、このときの写真は祖父江氏の著書『節談説教七十年』（晩聲社刊）にも使われた。また、1975年にはオリエンタル中村百貨店（現名古屋三越）で「節談説教師〈祖父江省念の世界〉写真展」を開催することになった。写真展の写真は大きく引き伸ばして展示する。引き伸ばすと省念住職のひげは針金のように見えた。本人が来場して、針金のようなひげを見て驚いていたことが懐かしい。その後も有隣寺との交流は続き、結婚式もここで挙げた。孫の祖父江佳乃さんが節談説教師となった現在は、撮影を再開し、毎年5月の第3日曜日に開催


節談説教師　祖父江省念氏（1975年）

される説教大会も撮り続けている。

同じ時期に、文宏氏の先輩俳優の藤城健太郎氏にＮＨＫ名古屋児童劇団を紹介してもらった。以来40年以上撮り続け、今年は児童劇団の70周年記念公演を撮影した。名フィル（名古屋フィルハーモニー交響楽団）がカメラマンを探していることも、人づてに聞いた。「いくらで撮ってくれますか」と言うので、「今までいくらでしたか」と聞いたら「ただでした」と言われたときには冷や汗が出たという。芸文（愛知芸術文化センター）コンサートホールでの撮影は、名演会館の島津秀雄さんの紹介で始まった。高校を卒業して知り合いのいない名古屋に来た中川さんは、人とのつながりで撮影の仕事を続けてくることができたと回想する。

職人を撮る

1975年、人形店のＰＲ誌『佳秀』で「美の伝統に生きる」という連載を担当した。獅子頭や雅楽の笛をつくる名古屋の職人たちの写真を撮った。

南部釜師　砂子澤三郎（1981年）

1978年には「パロマ・職人シリーズ」が始まった。パロマの広告ページで、1983年まで31回が『文藝春秋』に掲載された。取材先も自分で探し、連絡先を聞いて、アポイントをとっては、コピーライターと一緒に取材に行って撮影した。県の出先機関に出向いて、伝統工芸士を中心に紹介してもらった。青森の凧、山形の革細工、沖縄の紅型、芭蕉布、佐渡の蝋型鋳金など、全国の職人を撮影して歩いた。

この「パロマ・職人シリーズ」は1983年から1986年まで41回が『毎日グラフ』にも掲載された。

伝統を踏まえながら自分のものをつくっていく職人たちを数多く撮影したことで、人物の表情を撮る勉強になったという。

きんさん、ぎんさんを撮る

1978年、ワキタギャラリーで「魂の伝承 写真展」を開催した。これが、焼き物の撮影ができるカメラマンを探していた風媒社の創業者、稲垣喜代志氏との出会いにつながった。昨年10月に亡くなった稲垣氏とはなんでも話せる関係だったという。一昨年、清須市はるひ美術館で開催された「中川幸作写真展 命が煌めく瞬間」で展示した写真は、稲垣氏のアドバイスで陶芸家６人を新たに撮り直している。その際に稲垣氏の感性を再認識したという。オープニングにも来てもらった、と中川さんは一瞬遠い目になった。

その稲垣氏が、「きんさんぎんさん、どうだろう、写真集できんか」と声をかけてきたのは、1991年のこと。100歳の双子ということで、すでにワイドショーにも出ていたので、正直なところあまり気が進まなかった。それでもまずはあたってみようと、成田家と蟹江家に飛び込んでいった。「おばあちゃんの写真集を作ったって売れんだろう」と言われはしたが、両家付きのカメラマンということで、週に２、３度、撮影に通うことになった。撮影初日は、テレビなどの取材が多い日で、夕方にはお二人はすっかりお疲れ。大変な撮影になるなあと思ったそうだが、何回か通ううちにお二人から「ごくろうさんだね」と声をかけられるようになり、恩師を撮っているような、何か見透かされているような、それでいて「しっかり撮れよ」と言われているような妙な気分になったという。

１年ほど通って、残るは表紙と裏表紙の写真となった頃、「この週はほかの取材がないから中川さんの週にしてあげるわ」と言われ、これで仕上げられると喜んだ。ところが、その週に、舌の裏側に魚の骨が刺さってきんさんが入院してしまった。当時、このきんさんの初入院は大きなニュースになった。

きんさんの退院を待って、表紙と裏表紙の写真を撮り、『いまがしあわせ 写真集ーきんさん、ぎんさん100年の旅ー』（風媒社刊）が完成した。出版記念の写真展では主役はもちろん、きんさんとぎんさん。中川さんはここでもカメラを持って記録写真を撮っていて、テープカットにも参加していない。稲垣氏からは「写真展を３か所から頼まれちゃったよ」と言われ、100枚１セットの写真パネルを３セット準備して、木箱に入れてチャーター便で成田市から沖縄まで各地に送った。もちろん、それぞ

きんさんぎんさんと私（2000年　きんさんぎんさんの写真をバックに撮影）

れの展示会場に足を運んで報道関係者の対応をするのも中川さんの仕事。まるで風媒社の社員のような働きぶりだった。

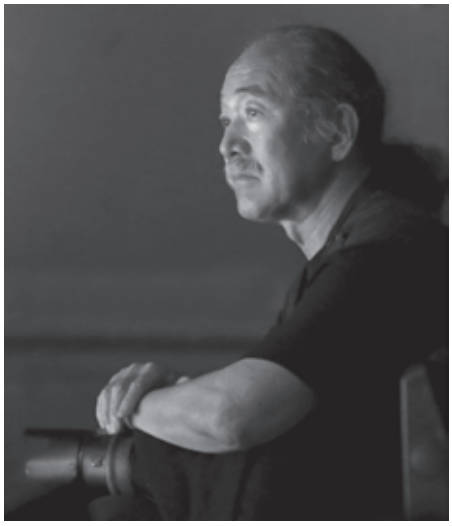
舞台を撮る

中川さんが舞台で撮るのは、指揮者、声楽家、ピアノ奏者、クラシックバレエ、モダンバレエなどと幅が広い。どんな場合もいちばん問題なのはシャッター音。カメラを見ただけでシャッター音が聞こえてくるという人がいるくらいで、気を使うという。

中川さんはオリジナルの消音ケースを使っていた。スタジオで見せていただいたのは、2011年に設計図を引いて作ったという3号機。かなりごつい感じだが、これを使えばほとんど音がしないそうだ。最近はカメラも進化していて、メーカーからはサイレント撮影機能の付いたカメラを薦められている。

写真展の図録を見ていて不思議に思ったことがある。オーケストラの指揮者の正面から見た顔が表情豊かに並んでいるのだ。指揮者は客席に背中を向けて指揮棒をふっているのだから、正面から撮るには舞台にのるしかない。どこで撮っているのだろう。

中川さんが秘密を明かしてくれた。芸文コンサートホールでは、なんと、パイプオルガンの中から撮るのだそうだ。開場前にパイプオルガンの点検口にカメラをセットしておくという。横顔は、舞台そでにあるのぞき窓から撮っている。舞台の撮影にはホールの間取りをおさえておくことが欠かせない。上演中は客席以外の劇場内を走り回っていて、オーケストラであれ、オペラであれ、鑑賞している暇はないという。



演劇の舞台の撮影現場（2012年　若松研　撮影）

伝統芸能を撮る

田峰観音奉納歌舞伎（1993年）

愛知県設楽町の田峯地区では、毎年、田峰観音大祭が行われ歌舞伎が奉納される。そのきっかけを中川さんが教えてくれた。

「徳川4代将軍家綱の時代、田峯の日光寺が火災に遭い、再建のために村人が当時天領だった段戸山に入って木を伐採してしまった。それを知った御油赤坂の代官が検分に来ることになり、村人たちは過ちを悔い、観音様に『村が3軒になるまで歌舞伎を奉納します』と願をかけた。検分当日、旧暦の6月の土用というのに雪が降り、代官は『こんな寒いところに木を伐りに来るはずがない』と引き返し、田峯は罪人を出さずにすんだ」

それから300年以上、太平洋戦争中も途切れることなく歌舞伎を奉納している。昭和50年代からは、田峯地区唯一の小学校、田峯小学校の生徒たちも、歌舞伎の担い手として舞台に立っている。中川さんは、1993年に「〈田峯子供歌舞伎・田楽・地狂言〉写真展」を開催した。

写真はテーマが広い。ネイチャーもあれば、報道もある。中川さんは、そのなかで舞台の記録という限られた分野を徹底的に追求してきた。柱が一つできれば、他の分野へも広がっていくという。そこに一つ加えるとすれば、中川さんの人の懐に飛び込んでいく大胆さが、仕事の場をつくり、被写体との距離を縮めてきたに違いない。

「なごや文化情報」に関するアンケートのお願い

右記の質問にご回答いただき、FAX、Email または郵送にて**12月17日（月）【必着】**までにお送りください。ご回答いただいた方の中から**抽選で20名様に名古屋市文化振興事業団の主催事業鑑賞補助券500円分をプレゼント**いたします。

※当選の発表は景品の発送をもって代えさせていただきます。お預りした個人情報につきましては、当該アンケートの事務連絡のみに使用させていただきます。

1　内容について、どう思われますか。
　①よい　②まあよい　③あまりよくない　④よくない
2　「なごや文化情報」の中で関心を持つ記事はなんですか。（複数回答可）
　①表紙　②名古屋市民文芸祭受賞作品　③随想　④視点
　⑤この人と　⑥この人と…ズームアップ（1・2月号のみ掲載）
　⑦ピックアップ　⑧いとしのサブカル
　⑨1年をふりかえって（3・4月号のみ掲載）
3　今まで「なごや文化情報」をお読みになって感じたことをご記入ください。
4　今後「なごや文化情報」で取り上げてほしい話題や、コーナーがありましたら、ご記入ください。
5　ご回答いただいた方の①お名前 ②性別 ③年代（30代など） ④郵便番号 ⑤ご住所 ⑥電話番号

【宛先】〒460-0008　名古屋市中区栄三丁目18番1号　ナディアパーク8階
（公財）名古屋市文化振興事業団・文化情報アンケート係
FAX：（052）249-9386　Email：tomo@bunka758.or.jp

ピックアップ

老人ホームでの演奏会

みなみシニア吹奏楽団・平均年齢60歳超えの熱い吹奏楽

中学・高校文化部の花形のひとつは吹奏楽部。コンクールへの参加を目標に青春の多くの時間を吹奏楽活動に費やし、たくさんの充実した記憶を残している人は多い。しかし卒業後は活動を続けたくても、就業や子育てなどで多忙であったり、数十人のメンバーでの練習場所の確保が難しい現状があったりと、吹奏楽活動は成立しにくいのが実情である。しかし、それぞれの胸に秘めた吹奏楽への熱い想いは消えることがない。

そんな中、平成27年度に南文化小劇場を管理運営する公益財団法人名古屋市文化振興事業団によって立ち上げられた「みなみシニア吹奏楽団」が多くの団員を集めて注目すべき活動を展開している。

平成26年度に南文化小劇場をホームベースに団員募集を開始、27年１月にはサックスパートの山中晶紀子さんを中心にサックス２人、クラリネット、フルートの計４人が集まり練習を開始した。半年後の６月１日の結成時には28人がメンバーとなり、27年度末には43人、28年度末には51人、29年度末には57人、そして平成30年９月19日現在では63名と着実にメンバーを増やしている。

定期演奏会の様子

みなみシニア吹奏楽団には30代から70代までのメンバーが在籍しており、平均年齢は60歳を超える。仕事を離れて自由な時間を楽器演奏に充てることができる人も多く、それぞれに楽しい時間を過ごしている。南区の高い文化性を反映してか、地元のメンバーが中心だが、古い友人からの誘いによる参加もあり、参加者が地元の地域に限定されないのも特徴。高山や四日市など、遠方からの参加者もある。また１割のメンバーは楽器の初心者だという。

活動は月２回、南文化小劇場を会場に水曜日の午前中の２時間程度と無理のない回数と時間設定となっているのも参加しやすい要因である。なお、平成30年４月から平成31年３月までは工事休館のため南区役所の講堂を会場に練習にはげんでいる。

吹奏楽の演奏は個々の技量の上達も目標の一つだが、なんといっても合奏こそが、一度味わうと忘れられない醍醐味である。心を一つにして演奏し、多くの聴衆に聴いてもらうことで、音楽の空間を全体で創造する演奏会は気持ちが高まり、満たされた時間を皆で過ごせる素晴らしい経験である。年齢に関係なく味わえる充実感がこの楽団の躍進の源であろう。

指導にあたるのは柴田祥氏。東海地区のオペラ団体やアマチュアオーケストラ、吹奏楽団の指揮者として経験豊富な指導者である。メンバーによれば「とにかく優しく、しかし的を射た音楽指導で練習が楽しい！」とのこと。それもこの楽団躍進の大きな要因である。「地域の皆さまを元気に、そして自分たちも元気に！」を目標に年１回の定期演奏会を中心に南文化フェスティバル、南区民まつり、セントレア音楽祭といった大編成による演奏会に加え、敬老会や老人ホーム演奏会などの小編成アンサンブルでの出演も多数である。終わることのない吹奏楽への情熱を燃やすメンバーは増え続け、音楽の輪が拡がっている。　（W）

いとしのサブカル

全国のレトロ好きが「昭和の日」に名古屋に集合！

アーティスト

菅沼（すがぬま） 朋香（ともか）

愛知県出身、埼玉県在住。名古屋芸術大学デザイン学部卒業、東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了。高度成長期と自身の関係をテーマに作品制作を行う。主なグループ展にあいちトリエンナーレ2013など。

みなさんは、ゴーゴー喫茶を知っていますか？

ディスコ登場前の1960年代後半～70年代前半にかけて流行した、エレキバンドの生演奏で両手を交互にアップダウンさせるゴーゴーダンスを踊る踊り場です。

もちろん私は生まれる前のことなので、行ったことはないのですが…。

サイケデリックカルチャーを色濃く取り入れた内装やリキッドライトは当時誰も観たことがなかった非日常の別世界で、最先端のクリエイターたちが集まる社交場となっていたそうです。

昔の映画でゴーゴー喫茶のシーンを観るたびに、こんなにカッコイイ場所がこの世に存在したなんて！！！一度でいいからゴーゴー喫茶に行ってみたい！！！と胸を熱くするばかりでした。

そんな願望を叶えるイベントが年に１度、昭和の日（４月29日）に、なんと名古屋で開催されています！その名も「グルーヴ・サウンズ！」。2012年にスタートしたゴーゴー喫茶再現イベントです。エレキバンドの生演奏、サイケデリックライトショー、ゴーゴーガール、お立ち台、行灯看板など…主催者こだわりのコンテンツが盛りだくさん。イベントに集まるお客さんもレトロファッションに身を包んだオシャレな人ばかりで、まさに当時にタイムスリップしたかのよう。名古屋の方はもちろん、遠方から駆けつけるお客さんも多く、全国の昭和レトロ好きが集まる夢のようなイベントなのです！

ゴーゴー喫茶再現イベント「グルーヴ・サウンズ！」

私も名古屋を拠点に活動していた頃に作品販売やライブ出演で関わらせていただき、関東や関西のレトロ好きな方とたくさん知り合うことができました。そして活動の拠点を関東に移してからも、「グルーヴ・サウンズ！」で出会った仲間たちと全国各地で様々なイベントを企画してきました。

現在取り組んでいるのは、2019年1月5日開催の「NEWROMAN EXPO’19 ー新春味園パビリオンー」。大阪の旧グランドキャバレー・味園ユニバースで、レトロフューチャー＆カオスをテーマにしたカルチャーフェスを開催します。

元ピチカート・ファイヴの野宮真貴さんなど豪華出演多数の中、私も「まぼろし屋台」を出展させていただきます。

2019年フェス始めは大阪「NEWROMAN EXPO’19 ー新春味園パビリオンー」で、そして4月29日（昭和の日）は名古屋の「グルーヴ・サウンズ！」へ是非お出かけください。平成最後の年、レトロで新鮮な昭和カルチャーを体験してみてはいかがでしょうか。

2019年1月に大阪で開催「NEWROMAN EXPO'19 ー新春味園パビリオンー」

やっとかめ文化祭2018

時をめぐり、文化を旅する、まちの祭典。

「やっとかめ文化祭」は名古屋の歴史・文化の魅力を一堂に集めた、文化の祭典。「辻狂言」をはじめ、多彩な伝統芸能の公演や、体験講座・ワークショップ、まち歩きなど、まちを舞台に、知られざる名古屋の魅力に出会う23日間です。

◆ 芸どころ名古屋舞台 ◆

名古屋づくし大須舞台～尾張名古屋は城で持つ～
日時：10月28日(日)14:00
料金：一般3,000円　学生1,500円【全自由席】
会場：大須演芸場　　Pコード：488-111

劇座公演 名古屋弁娯楽劇
宗春の時代～名古屋城下は華の賑わい～
日時：11月3日(土・祝)13:30、18:00
　　4日(日)　13:30
料金：一般3,000円　学生1,500円【日時指定・自由席】
会場：北文化小劇場　　Pコード：488-113

ろうそく能 狂言「文相撲」 能「船弁慶」
～四百年の時を超えて 藩祖義直上覧の能を楽しむ～
日時：11月10日(土)14:00
料金：一般3,000円　学生1,500円【全自由席】
会場：名古屋能楽堂　　Pコード：488-115

世界最古のオーケストラ 雅楽～歴代藩主も親しんだ雅の音色～
日時：11月18日(日)14:00
料金：一般3,000円　学生1,500円【全自由席】
会場：名古屋市芸術創造センター　　Pコード：122-855

チケット取扱い
○名古屋市文化振興事業団チケットガイド　TEL:052-249-9387(平日9:00～17:00／郵送可)
※そのほか事業団が管理する文化施設窓口(土日祝日も営業)でもお求めいただけます。
※工事休館等がありますので、ウェブサイトでご確認ください。
○チケットぴあ　TEL:0570-02-9999
※サークルK・サンクス、セブン-イレブンでも直接お求めいただけます。

オープニング
日時：10月27日(土)13:00
会場：名古屋城イベントステージ
料金：無料

芸どころまちなか披露
辻狂言、ストリート歌舞伎、寄席、お座敷芸など、名古屋のまちなかで伝統文化に出会う各種ライブを開催。
期間：10月27日(土)～11月18日(日)
会場：名古屋城イベントステージ　ほか

まちなか寺子屋
歴史的な建造物などで、歴史や伝統文化を楽しく学ぶ講座・ワークショップなどを実施。〈全20講座〉
期間：10月27日(土)～11月18日(日)
会場：市内各所
料金：500円～4,000円

まち歩きなごや
名古屋の魅力を再発見する「まち歩き」を実施。
〈全40コース〉
期間：10月27日(土)～11月17日(土)
定員：各回20名　　会場：市内各所
料金：1,000円

◆日程：2018年10月27日(土)～11月18日(日)　◆主催：やっとかめ文化祭実行委員会
＜構成＞名古屋市(文化振興室、観光推進室、歴史まちづくり推進室、文化財保護室)、(公財)名古屋市文化振興事業団、(公財)名古屋観光コンベンションビューロー
中日新聞社、名古屋観光ブランド協会、特定非営利活動法人 大ナゴヤ・ユニバーシティー・ネットワーク
◆問い合わせ：やっとかめ文化祭実行委員会事務局(NPO法人 大ナゴヤ・ユニバーシティー・ネットワーク内)TEL052-262-2580
※事業の詳細はhttp://www.yattokame.jp/ をご覧ください。

環境にやさしい企業を目指します

わたしたちの会社ではISO14001を取得、
印刷にかかわる制作から配送まで、トータルで環境に
やさしいシステムを構築、環境負荷低減印刷を目指します。

中日高速オフセット印刷株式会社
〒462-0847 名古屋市北区金城四丁目3番19号
TEL (052)914-1711　FAX (052)914-7913
http://www.c-offset.co.jp
ISO 14001 JQA-EM3417　プライバシーマーク 19000485

舞台VTR映像専科
ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ビデオソフトの企画制作
有限会社 エーワン.ビデオ.システム
TEL (052)896-2256　FAX (052)896-4100

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ
この領域を超えて最高のパフォーマンスを。
20Hz ← → 20kHz
A&V PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響／映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売
お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400　FAX/052-761-0909

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。
ナゴヤ劇場ジャーナル
◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・舞踊・音楽公演・ホール、DM等にて配布
公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい
MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ
〒461-0004 愛知県名古屋市東区葵2-11-22 アバンテージ葵305
TEL (052) 508-5095　FAX (052) 508-5097
URL http://www.mane-pro.com
業務内容 ①舞台の企画・制作マネージメント ②イベントの企画制作 ③芸術団体のコンサルティング ④舞台・イベントの運営
マネっちゃ

デザイン・印刷／中日高速オフセット印刷株式会社

平成30年10月25日発行(隔月1回25日発行)通巻383号　編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団　〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号　TEL(052)249-9385　FAX(052)249-9386　HP http://www.bunka758.or.jp/